



いとこたちと

普段慎ましやかにひっそりと暮らしている宮川の家も、夏の向日葵が咲いたようににわか  
に明るく賑やかになり、祖母や母も元気づけられていたように思われる。

もして来た。気丈でおとなしい宮川の祖母は淋しく  
なった家を一人守って居てくれる日が多くなった。  
一方で、我が家には、毎年のように夏休みになる  
と、東京から従兄で同い年の修ちゃん、その姉の繁  
ちゃんたち家族が来て長逗留<sup>ながとまりゅう</sup>していた。下の大井を  
堰<sup>せ</sup>いで水遊びをしたり、向こうの小川でめだかや、  
どじょうを採ったり、野山を駆けめぐって遊んだ。

### 第三章 学生時代

#### 一、国民学校の頃

わたしは、昭和十六年四月に下久堅国民学校へ入学した。

校長は宮下功先生といった。百余名の入学児童は明組、正組の二クラスに分けられ、わ  
たしは明組。担任は師範出の倉田利久先生という二十七歳の若い先生であった。

東京より繁ちゃんのおさがりのハイカラな洋服をたくさん頂くので、その中から着せて  
もらい、母の妹で愛知県稲武に嫁いでいる叔母から頂いた上等のランドセルを背負い、母  
に連れられ入学した。

級友に宮下校長先生の次男信彦君がいた。彼もお母さんに連れられ来ていたのだが、驚  
いたことに彼のお母さんと母は女学校の同級生で、大正十一年三月女学校卒業以来の出逢  
いであった。信彦君のお母さんはこの学校の校長夫人、かたや母は夫に先立たれ、未亡人  
となつてわたしを連れて行ってくれたのであったが、なんとも吃驚<sup>びっくり</sup>した出逢いであつたと  
後々まで語ってくれた。

この昭和十六年の暮れ十二月八日に日本はハワイオアフ島真珠湾にあったアメリカ海軍の太平洋艦隊と基地に対して航空攻撃を開始（太平洋戦争）、第二次世界大戦に参戦した。

学校は、わたしの家から歩いて二十分くらいのところで、村の中心集落知久平にある。一クラスが五十余名、子どもたちは背丈の順に男女二人が席を並べた。わたしは女の子で一番背が高く、男の子で一番背の高い宮内嘉人さんと並んで三年間勉強したが、嘉人さんは何でもよく出来た。わたしも結構はつきりしていたが、歌（音楽）は得意でなかった。これは父に似たのかもしれない。

毎年二月の寒い頃、板の間の寒い体操場で学芸会があり、どの学年も先生に教えられ、劇を発表した。一年生の時正組と一緒に「浦島太郎」の劇をし、正組の宮脇久平さんが浦島太郎、わたしが乙姫様を演じた。これはうれしかったせいか鮮明に覚えている。多くの友だちが木綿の絆天はんてんを着ている中で、わたしは綺麗な模様のメリンスで母が縫ってくれた絆天を着て演じた。

その頃、女の子の遊びは毬つき、お手玉。唄に合わせて毬をついたり、お手玉を投げあげた。学校の休み時間や、家へ帰っても遠く近くの友だちと、精一杯遊んだ。下久堅は和紙の産地で紙を漉く家が多く、南原みなばらでは小杉山、紙屋、元屋なども和紙づくりをしてお

り、そこへもよく遊びに行った。漉いた紙を長方形の板に貼ってたくさん並べ日に干してある。その陰を利用して、わたしたちはよくかくれんぼをした。学校の帰りは遠く廻り道をして帰ったり、学校近くの小川でシジミを採ったりして遊びながら帰って来たのも楽しい思い出になっている。父が亡くなって淋しいと思ったことはなかった。

けれども時代は大東亜戦争の最中で、学校には御真影ごしんえい（当時天皇陛下のお写真をそう呼んだ）が保管されている奉安殿ほうあんてんがあり、授業が終わるとこの前でクラス全員「さようなら」を言って帰った。また、元旦式、紀元節（二月十一日）、天長節（四月二十九日）、明治節（十一月三日）など大切な儀式の時には、校長先生が礼服を着用されて恭しく御真影ごしんえいを出して来られ、体操場正面にお飾りし、一同最敬礼、次に白手袋で大切に扱って「教育勅語」をお読みになられた。

玄関前には、お手本にするようにと二宮金次郎が薪を背負って本を読んでいる姿の銅像が立っていた。お弁当はどの子も「日の丸弁当」と言っておはんの上に梅干一つと漬物だけの簡単なものであった。「欲しがりません勝つまでは」の合言葉のもと、物がなかったから何でも大切にした。

冬でも教室には炭の火鉢があっただけ、そのうちに薪のだるまストーブが入り、火を焚いて煙突を通して部屋が温まるようになった。子どもたちはストーブの燃料の薪を四十分



国民学校3年 奉安殿前（文永寺）

## 二、戦争の影

くらいかけて北原の集落まで背負いに行つた。

戦争が激しくなると、時々出征兵士を各集落のお宮へ朝早く見送りに行くようになり、学校では戦地の兵隊さんへ慰問の便りも書いた。わたしの集落から出征していた高橋一郎さん、青島正美さんはよく返事を下さった。お二人とも無事で帰って来られたのは嬉しいことだった。

戦争は激しさを増し、戦死された英霊の御遺骨が帰って来るたびに子どもたちもお迎えに参加した。世の中は戦争一色、そのうちに「鉄砲の玉などに使うから家にある鉄製のものは全部供出するように」とお達しがあり、家でも昔からの手打鉢、釣燈籠、火鉢、床置、唐紙の手かけ、箆笥の引手、ニュームの弁当箱、母が父から結納に戴いた金の指輪、結婚祝に飯田病院の叔父から戴いたという金時計など、みな供出してしまった。でも戦地で家族を亡くされたり、戦災で何もかも無くしてしまった方たちのことを思えばたいしたことではないと思つた。

戦地の兵隊さんたちに送るための食糧増産にと、学校でも校庭の敷地半分くらいにさつまいもが植えられ、通学道路の両側へは大豆を播き、わたしたち少年団が手入れもした。

学校の費用にするためと子どもたちは、蚕の桑を採ったあとの桑棒の皮を剥ぎ、学校へ集めてお金を換えたり、出征兵士留守宅へは勤労奉仕で麦踏みに行つたり、「お国のために」と、子どもたちも働いた。

三年生の途中で校長先生は野沢宏先生に代わつたので、級友の信彦さん（宮下校長の次男）とも別れることになった。担任の倉田先生も三年間で長野師範附属小学校へ転勤された。お別れのことばに「今は大東亜戦争の真最中です、男子が天皇陛下のおそばにまいる日も近い。たくましい日本の子どもになれ。女の子はこの日本の春のように、明るくやさしい心を持ち続けよ」と、子どもたちの日記集のはじめに記されてある。

今振りかえると、学校で初めて出逢つた先生が立派な方でわたしは幸せだったと思う。

四年生になると、男女別々のクラス編成になり、

担任は青年教師の原善次先生になった。今考えるととても熱心で愉快な先生だったのに、何がそうさせたのか校長先生のところへ女子全員で、「原先生を辞めさせて戴きたい」とお願いに行った。恐れも何も知らない四年生とはいえ恥ずかしいことをしたものだと思う。

更に戦争は厳しさを増し、昭和十九年の夏から学童の集団疎開が始まっていた。東京から従兄の修ちゃんが我が家へ疎開して来て男子クラスへ編入した。この頃になると都会から学童疎開で長野に来た多くの友だちが、寺で集団生活をしたり、縁故をたどってそれぞれの家庭へ宿泊して一緒に勉強するようになっていた。やがて昭和二十年三月には東京大空襲で、修ちゃんの東京の家も焼けてしまい、叔父、叔母、姉の繁ちゃんも疎開して来た。時局は逼迫してきたが、女三人のひっそりとしていた我が家は彼らを迎え賑やかになつて、子どものわたしにはなんだか嬉しいような日々であった。それでもだんだん食糧事情が悪くなり、こんな農村の我が家でも一晩のうちに成っている南瓜を五個も盗まれたりしたこともある。食べられる土手の野草を摘みに飯田や鼎方面から電車に乗って来た大勢の人たちが里山に入るようになっていた。

B 29の爆撃で多くの都市が焦土化。沖縄全滅、広島、長崎への原爆投下。そしてついに二十年八月十五日には終戦を迎えた。戦争終結の玉音放送の時は、ちょうど家に居て、

母、祖母と一緒にラジオを通して天皇陛下の御声を聞いた。わたしはすぐに、いつも可愛がってもらっている清中屋へ知らせに跳んで行った。B 29が飛来した時目立たぬように家の白壁を黒く塗るように指導があったので、清中屋では千治お祖父さんが終戦を知らずに一生懸命壁を塗っておられたことを覚えている。

長い戦争は多くの犠牲者を出して終わり、わたしは五年生となった。校長先生は久保田正人先生に代わり、担任は若い女教師中尾かおり先生になった。中尾先生は丸顔のやさしい方であった。六年生の時には中年の平沢智登世先生に教えていただいた。平沢先生は、今では考えられないことであるが、下久堅の婦人会長も兼ねられていた。六年に進級してから、来春は女学校の受験だということで、何人かの友だちと飯田へ参考書を買に行つた。戦争が終わり、アメリカのマッカーサー元師を先頭に進駐軍が各地へ配属されるようになり、新しい民主憲法が公布され、日本は軍国主義から民主主義に移り変わって行った。新教育体制も決定され、男女共学、六・三・三・四制が実施されることとなり、昭和二十年三月までに国民学校を卒業する者は旧制で進学していたが、昭和二十二年三月以降に卒業した者から全員新制中学校に進学することになった。わたしたちはちょうどこの切替えの学年で、全員が新制中学校へ進むこととなり、受験の必要はなくなった。

修ちゃん一家はお父さんの生家のある諏訪市豊田の実家の離れをお借りして住まれるこ

ととなりこの年行ってしまわれた。子どもたちにはわからなかったろうが、他家住いで大変苦労され、お気の毒だったと今にして思う。

### 三、中学校の頃

昭和二十二年、日本初の社会党内閣（片山哲内閣 五月二十四日から翌年三月十日まで）が成立して農地改革が実施された。現在自分で耕作している面積の他に貸付地七反歩（二二〇〇坪 約六九四二㎡）は保有出来、あとは全部耕作者に解放するというのである。どんな小さな地主も同じように余分な土地は手放すこととなり、我が家でも、わたしが聞いているところでは二町歩（六〇〇〇坪）余の土地を十五名に解放した。一時は飯米を配給米に頼ったのか、母が籠を背負いわたしも一緒に三十分くらい歩いて農協の配給所へ行って、配給を並んで待っていたのを覚えている。

さて義務教育となった新制の中学校は、小学校だった校舎を下久堅小学校と下久堅中学校が分けて使用した。教員室も二カ所で、中学校は茂木住平校長先生以下十五名の先生方だった。男女共学となり、全校生徒は三百余名、わたしたち一年生は三クラスあって、わたしは一組、担任は牧内文雄先生であった。小学校と違って教科ごとに先生が変わり、英語がとりいれられ「JACK AND BETTY」という英語ばかりで書かれた教科書は大変珍

しくうれしかった。

三年生になり近くの文永寺の和尚さん新井悦道先生が担任とられた。けれども先生は結核を患い休養され、副担任だった若い倉橋長治郎、宮下覚の両先生が面倒をみて下さるようになる。先生方は若い先生が多く、皆熱心で、英語の小池茂彦先生を中心に、クラス会歌、応援歌、久堅小唄などたくさん作詞、作曲され生徒等に歌わせて下さった。

中学校では、竜峡七地区の学校が野球、バレー、陸上競技ではソフトボール投げの選手、バレーでは主将は全校から選んだ。三年生の時、陸上競技ではソフトボール投げの選手、バレーでは主将



バレーボールでは主将



修学旅行で進駐軍と記念写真

で前衛のセンターをさせてもらった。あまり勉強しないので学力は落ち目ではあったが、校友会の副会長でもあった。ようやく修学旅行も出来るようになり、二泊三日で名古屋・奈良へ電車に乗って行った。一泊は愛知県の大同毛織、大高工場へと分宿、奈良は猿沢の池畔吉田屋

旅館（この旅館は今も同地で営業している）へ泊った。旅行のしおり持物欄には「米九合、三合はなるべく白米、六合は麦を入れてもよし、漬物等も持って行く方が都合が良い」などと記載されている。

家では母が冠婚葬祭のお義理を面倒がり、子どもで済むところへはわたしを伺わせた。だからわたしは、当時大人の口上がとても上手に話せた。母と祖母はお互いあまり喋らず、それぞれ、わたしの成長だけを楽しみにして慎ましやかに暮らしていたようだ。

## 第四章 青春の日々

### 一、風越高校時代

昭和二十五年四月五日、わたしは風越高校へ入学した。

終戦後、義務教育になった中学校を終えて後、受験をして高校へ進むという学制改革が三年前より行われた。わたしたちの学年は、実質的な新制中学の第一回の卒業生として高校受験をしたということになる。

当時、男子は高校へ進む以外は、長男は家で農業を手伝ったり、次・三男は東京へ就職する人が多かった。女子は中学校を終えると関西の紡績工場へ就職する人が多く、下久堅中学校の女子五十余名中、風越高校普通科へ進んだわたしを含め高校へ進学した人は普通科四名、被服科へ二名の六名だけだった。旧制の飯田女学校は、以前は尋常高等小学校（昭和十六年から国民学校）を終えて受験、一五〇名程が入学できただけだったが、新制高校では四二〇名程が入学できるようになった。試験は一日だけになり、進学希望の人は殆ど入学できたので、合格したと言っても私はあまり感激が湧かなかった。